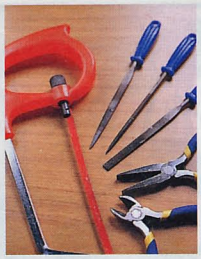
新規創業支援研修
期間＊全8回コース／2カ月
費用＊1万円

福祉用具開発者に

半身まひの身になって、果たすべき役割が見えた。経営の基礎を学び、起業に自信が

福祉用具機器研究開発の会　原田太郎さん（65歳）　神奈川県愛川町



試作用に準備したのは100円のコップ数十個と、糸ノコとやすりセット。「私が口を出し、妻が手を出して加工。世話をかけました」

歴代の試作品の一部。市販のコップを削ったり、陶芸を応用したり。満足できるものが完成するまで、2年の歳月を費やした

研修資料には、体の不自由さをものともしない書き込みがぎっしり。いくつかの講義録は今も原田さんのバイブル

小さい市場だが確実に待つ人がいる

父と母も見舞われた脳卒中に、自身も襲われたのが、03年初春。会社員時代は典型的な仕事人間、60歳からは趣味で料理屋を始めるなど、自由に生きてきた。それが突然の病で左半身まひに。7カ月に及ぶリハビリでも機能は回復せず、原田さんは呆然と自分の未来を考えた。

「店にはもう立てない。かといって仕事を見つける方法も思い浮かばない。このままじゃ家族のお荷物になるだけだ。何とか自立しなきゃ、と思いました。でも半身まひで何ができるか。悩みました」

退院が迫る頃、ある看護師がヒントをくれた。

「体がまひして何に困ったの？と。何より大変だったのが、歯ブラシに練り歯磨きを付けることだった。だったら片手でも、それができるコップをつくったらどうか。これだと思いました。できるかどうかわからないけど、そのコップをつくることが自分の使命だと」

退院するとすぐに妻の手を借りて試作を開始する。だが、試行錯誤を続ける中で、ふと、コップができた後、どうするかを考えた。

「事業化するにしても、起業の経験なんてない。会社員時代に雇われ社長もやったし、料理屋もやりましたが、全部自己流でしたし。勉強せにゃと役所を訪ねたら、財団法人の神奈川中小企業センターを紹介され、かながわ起業家アカデミーという研修の存在を知り、参加してみることにしたんです」

経営の基礎から説く専門家の話は、驚くほど新鮮だった。これならばと自信が付いて、福祉用具開発での起業を決意。1年後、ようやく納得できるコップが完成。「パラリンコップ」の名で商標も取得し、06年の秋には製品として世に出る予定だ。

「入院していた病院からは、ほかの製品のリクエストももらっています。福祉用具市場は小さいけど、確実に待っている人がいるんです。負け惜しみじゃなく、こういう体になって良かったのかもしれない。おかげで自分自身を真剣に見つめ直すことができましたから」

退院後、まずは免許を更新した。「この福祉車でどこでも行ける。人間、その気になれば何とかなるものです」

【DATA】
- ●開業／2005年1月　●開業資金／60万円
- ●年間売上高／非公開
- ●事業内容／福祉用具・機器の企画開発

アクセスはこちら！
E-mail:harada-t@gb3.so-net.ne.jp

学んだのは

（財）神奈川中小企業センター

起業の基礎をプロが指導

事業計画書の書き方や資金計画、税務など実務の基礎知識と共に、起業に対する心構えや着眼点など、「起業したい人・起業間もない人」に専門家が講義。個別指導もある。

http://www.ksc.or.jp/

どうしてこの職業を選んだ？

自分と仲間の自立のため

“半身不満足”になった自分が自立するには、私にしかできない仕事をするしかないと思いました。そしてこのコップ開発は、同じ苦しみを持つ仲間を自立させる助けにもなる。私にとって、唯一かつ最善の選択肢でした。

「学んで独立」を目指す人へ

公的機関は徹底活用を

センターを通じて神奈川県産業技術センターに試作品製作を助けてもらったり、大学の福祉工学科を紹介されたり、お役所もいいことをたくさんやっているんです（笑）。これを利用しない手はないと思いますよ。